

2019年
5月20日
月曜日

私たちは可能なら自由にしたいことをして、束縛されずに生きたいと考えている。育った家庭が経済的に比較的豊かで、十分に教育を受けた人ほど、そう考えるのではない。以下の文は、基礎演習で用いたテキスト、松井彰彦著「市場って何だろう」第一章を読んで私が思うところをのべたもので、部分的に依拠している。

多くの人は、企業や役所等の組織に所属し働いて、生活の糧を得ている。これらの企業や役所は、企業ならば事業を通じて利潤を得ること、役所など非営利組織は企業では供給できない、公共サービスの社会や個人への提供が目的の「共同体」である。「共同体」は企業や役所だけではなく、地域社会や家族もそうである。現在は、自分の居住する場所である「地域共同体」を自ら選択できるが、分業が可能な経済システムが発達する前の農業・漁業等が中心の時代では、自らの居所を選ぶ自由はなかった。「共同体」では、それに所属する人々が、モノやサービスを分かち合

新海 哲哉 教授（理論経済学）

自由・リスクと従属・安定、自立と依存 市場と共同体について考える。

うと同時に、相手には自分に有用なモノやサービスを提供し、相手からは自分にとって有用なモノやサービスの提供を受けるので、「互恵的」お互いさま」という考え方が重要となる。「共同体」の本質的特徴は、それに属する人間が比較的頻繁に顔をあわせることである。こうした「共同体」では、そのメンバーが、「互恵的」でなく、「利己的な」行動をとった場合は、共同体の秩序を乱した場合は、「共同体」の集団から締め出される（解雇や、村八分など）。

これに対し、工業やサービスの発達とともに、自分の「居場所」の移動が自由になると、人々が集まり、お互い「顔の見えない」集まりとなったのが、「都市」である。こうした「都市」では、モノやサービスの配分は「共同体」とは異なり、「顔の見えないつながり」の人々間の市場取引で決まる配分となる。都市では移動が頻繁なので「地域共同体」は形成されにくく、企業など働く場所も多数あることから「転職」

が容易となる。こうした都市が築く現代社会では「最小の単位の共同体」である「家族」も、親の企業での転勤や単身赴任、子供の進学や就職による「自立」で分断され、子供を通じてつながりもなくなり「地域共同体」の維持が困難となる。

確かに、市場経済が中心の都市では、「共同体」に属することの束縛から逃れ、自由にできる。しかし、自由にはリスクも伴う。「共同体」に従えば、「給与」をもらい安定した生活ができるが「共同体」は永遠ではない。自ら「家庭」で豊かに育ち、十分な教育を受け才能のある人の中から一部は、「従属」を嫌い、「自立」を求める。企業や役所を飛び出して、「自立」のため「起業」し組織を作るかフリーランスとなれば、自らの労働、モノ、サービスを市場に供給し、生活の糧を得る必要がある。買い手がつかず、生活の糧が得られないリスクも負わねばならない。「共同体」を嫌い、自立と自由を求め一人籠る生活の中で、「つながり」

を求める人たちが狙って、詐欺や犯罪が増加するという悪い側面もあるが、通信技術やインターネット、ソーシャルネットワークサービスなど発達により、「共同体」より「緩い」つながりを求める人たちに、趣味の活動、ボランティアなど、従属のない、「顔の見えないつながり」も作る事ができる。

社会変化が激しい現代では、従属しや合併、部局の統廃合などで、突然自分が「市場」に放り出される可能性もある。市場つつも、居心地のいい安定した、自分が属する企業や役所などの「共同体」の倒産では、「自立」して、厳しいが努力したなりに「成果」も得られるが、リスクも伴うので覚悟して生きる必要がある。そのためには、家族や勤務先など一つの「共同体」のみに依存するのではなく、地域、趣味、ボランティアなど様々な「緩いつながり」に依存先をも増やすことが、大切である。そうすることが、精神や身体の健康を維持するため、仕事と生活のバランスをとるため、わが身を守ることが、現代に生きる我々の「知恵」だと思ふ。